

「これからは今までとは違う。」と誰かが言うのを聞いたことがありますか。重病を患った人の言葉かもしれません。また、結婚したら、これは確かにそうです。初めて親になる人もこう言うでしょう。また、私は愛する人を亡くした方々に言ったこともあります。そして、それは本当です。人生を左右するこのような出来事の後には、今までとは全く異なる生活になります。

では、皆さんにお尋ねします。あなたの人生を左右した出来事の一位と二位は何ですか。初めての仕事に就いたときでしょうか。また、学校に入ったときでしょうか。結婚した時という人もいますでしょう。「私が生まれたとき」と思った人は何人くらいいるでしょうか。正直に言うと、私はそうは思いませんでした。しかし、私の誕生によって、私の未来は動き始めました。その日から神様は私の人生の計画を立ててください、これまで私はその計画に沿って生かされ、またこれからも生きていきます。

「神様は私の人生の計画を立ててください、これまで私はその計画に沿って生かされ、またこれからも生きていく」という表現はちょっと宿命論者のようですが、エペソ1:11にはこう書いてあります。またキリストにあって、**私たちは御国を受け継ぐものとなりました。すべてをみこころによる計画のままに行う方の目的にしたがい、あらかじめそのように定められていたのです。**今日はこの節について深くは触れませんが、短くいくつかお話しします。

一つ目に、私たちの救いは神様から始まります。キリストにあって、神様は私たちを選びました。私たちが神様を信じるためです。また、この世が造られる前から神様が私たちを選んでおられたことも私たちは知っています。エペソ1:4 **すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方にあって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。**

二つ目に、私たちは**あらかじめ定められています。**すなわち、神様が選ばれるのです。キリストにある救いの歴史は神様がすべてをみこころのままに定められます。例えば、異邦人とユダヤ人は主イエスを処刑しようと共謀しました。しかし、それは御子に対する神様のみこころでした。使徒4:28 **あなた(神様)の御手とご計画によって、起こるように前もって定められていたことすべてを行いました。**

三つ目に、エペソ1:11を踏まえて、エペソ1:13を読みます。クリスチャンは**キリストにあって…約束の聖霊によって証印を押されました。**これも神様がしてくださることです。

四つ目に、神様は、キリストにあって選ばれ、ご自身の誉れとご栄光のために、すべてがみこころのままになるようにあらかじめ定められています。(エペソ1:11)

では、最初の質問に戻りましょう。あなたの人生を左右した出来事の第二位は何ですか。皆さん、それぞれ違うかもしれません。とてもロマンティックな人は、ファーストキスでしょうか。結婚式でしょうか。第二の誕生だと思った方は何人くらいいるでしょう。キリストを信じた日です。あなたが再び生まれた日です。使徒パウロはこの出来事を次のように言っています。(2コリント5:17) **ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。**

あなたが生まれた日(厳密には受胎した日)は人としてのあなたを決定します。あなたが誰なのかが明かされる旅の始まりです。しかし、あなたの第二の誕生は、それ以上に重要です。なぜなら、その日はあなたが神様の子とされた日だからです。あなたがキリストにあって永遠に御国を受け継ぐ者とされる確信を与えられた日です。私たちはこれに何も付け加えることができません。キリストにあって、あなたの罪は赦され、あなたは神様と和解し、永遠のいのちをいただいたのです。

ローマ3-5章は、神様が私たちをご自身との正しい関係に導かれる方法について記しています。いくつか節を取り上げましょう。ローマ3:20は良い行いや、律法に従うことによって、神様と正しい関係を築くことはできないと明言しています。**なぜなら、人はだれも、律法を行うことによって神の前に義と認められないからです。律法を通して生じるのは罪の意識です。**神様の正義は、私たちの罪の代価が払われることを要求します。そして、それを私たちは自分では払うことができません。救いを自分の力で手に入れることはできないのです。神様との正しい関係とは、キリストを中心にして成り立ちます。ローマ3:22 **イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。**

ローマ4章で、使徒パウロは神様との正しい関係を築いた人の例としてアブラハムを取り上げました。創世記15：6を引用し、パウロはローマ4：3でこう書いています。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた。」またローマ5：1、2aにおいて、私たちの新しい関係について全き確信を私たちは与えられます。こうして、わたしたちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストにあってよって、神との平和を持っています。このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。

ローマ5：12-21には、私たちは(神様に反抗した)アダムの子孫なので、罪人であることが示されています。

これは、聞きたくないことかもしれません。しかし、これが真実であることは少し考えればわかることです。人類の良いところだけを受け継いでいると信じる人は、歴史をあまり知らないといえるでしょう。さらに彼ら自身のこともあまりわかっていません。

ローマ5章でパウロは何度もこれを強調しています。アダムの子孫である私たちは、神様との関係が死に絶えています。これは悪い知らせです！しかし、パウロは私たちに死刑宣告をするためにそう言っているのではありません。彼が言わなくても、キリストなしでは私たちはすでに死刑宣告を受けています。

むしろ、パウロはローマ5：12-21を通して何度もキリストにある永遠のいのちを私たちに繰り返し保証してくれています。(永遠のいのちという表現は、キリストにある救いによって受けるすべての益を要約しています。) ローマ5：19を考えてみてください。すなわち、ちょうど一人の人(アダム)の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、一人(キリスト)の従順によって多くの人が義人とされるのです。これこそ良い知らせです！キリストの完全なる従順、その義が、キリストを信じるすべての人に帰されるのです。

ローマ6章は2つに分けられます。それぞれのパートはよく似た質問で始まります。6：1**それでは、どのように言うべきでしょうか。恵みが増し加わるために、私たちは罪にとどまるべきでしょうか。**この答えは6：2から始まります。**決してそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうしてなおも罪のうちに生きていられるのでしょうか。**パウロは、この後クリスチャンが罪に死に、キリストにあってよみがえって新しいいのちをいただくことを記しています。さらに、私たちは罪から解放されます。6：6-7**私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減ぼされて、私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです。死んだ者は、罪から解放されているのです。**

この前に、パウロは律法によって私たちは罪を知ると書いています。(5：20) 実際、これは明らかです。もし道路交通法がなければ、私たちは違反することも、罰金を取られることもありません。ただ、おそらく長生きもできないでしょうが。

それゆえ、パウロはこう結論を記しています。6：14**罪があなたを支配することはないからです。あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にあるのです。**何という救いでしょう。私たちの義(神様との正しい関係)が神様の律法を守ることで得られるものならば、私たちには希望がありません。

6：15でパウロは1節と似た質問をしています。**では、どうなのでしょう。私たちは律法の下ではなく、恵みの下にあるのだから、罪を犯そう、となるのでしょうか。決してそんなことはありません。**このような考えにパウロが強く反対していることに注目しましょう。

6：16でパウロは奴隷のたとえに戻ります。**あなたがたは知らないのですか。あなたがたが自分自身を奴隷として捧げて服従すれば、その服従する相手の奴隷となるのです。つまり、罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至ります。**パウロはあなたが罪の奴隷か義の奴隷のどちらかであるという議論に発展させ、罪の奴隷は死に至ると記しています。罪の奴隷であることは神様と正しい関係を築くという考えを抹殺します。罪の奴隷がどんなものかは、詳しく説明する必要はないでしょう。もしわからなければ、ガラテヤ5：19-21を読んでください。そこには罪の性質に起因する行動が羅列されています。それらは明らかです。(5：19参照)よくわからない人は、新聞を読んでください。パウロがガラテヤ5章に記した罪の行動の例が山ほど見つかるでしょう。

義の奴隷は、罪の奴隷の対義語以上の意味があります。罪の奴隷は、縛られ、自由を奪われ、死に至ります。一方、義の奴隷には、本当の自由が与えられます。ローマ6：18**(あなたがたは)罪から解放されて、義の奴隷となりました。**

ジョン・ストット師は、「奴隷は自由であり、自由は奴隷である」という逆説を立てました。つまり、奴隷には二種類あるということです。しかし、本当の自由を与えるのは、一つだけです。罪の奴隷は、自由に罪をおかすことができます。ある意味自由があるといえるでしょう。しかし、それが私たちや社会にもたらす結果は恐ろしいものです。もう一度言いますが、新聞を読んでみてください。一方、義の奴隷は、実は全く奴隷ではありません。神様の喜ばれるように、神様があなたに望まれるように、そして神様の誉れとご栄光のために生きる自由が与えられているのです。

「どうしてわざわざこんなことを考えなければいけないのか。」とと思っている人がいるかもしれませんが。その答えはローマ6：22にあります。**しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得ています。その行き着くところは永遠のいのちです。**

この益こそが大切です。地獄がいいところだと思っている人がいることは知っています。そのような人は、地獄で仲間と心ゆくまで飲んだり、たばこを吸ったり、すすんで罪をおかし続けることができると思っています。あなたもそう思っているなら、それは大間違いです。

聖書は、地獄は神様から隔離されたところと記しています。第二の死とも呼ばれています。また、悔い改めない罪人のために用意された火の池として描写されています。(黙示録20：14-15)

キリストにある自由は、本当の意味での解放です。この自由は、ついにはあなたを神様が修復された楽園、新しいエデンへと連れて行ってくれます。新しい天と地です。(黙示録21章) そこでは、クリスチャンは神様、人々、新しい天と地との完全なるあるべき関係に戻され、そこでの生活を楽しまします。私が行きたいのは、新しい天と地です。

いや、私は自分がどこへ行くか知っています。あなたもキリストを信じているなら、知っています。キリストを信じる救いの信仰とは、とてもシンプルですが、とても難しくもあります。シンプルなのは、それがキリストがあなたの代わりに十字架で死んでくださり、あなたの救いのために死からよみがえられたと信じるだけだからです。また難しいのは、それがあなたの人生をキリストに捧げることを意味するからです。神様の恵みに対し、その御手に自分の人生をゆだねることで応答します。自分を明け渡すのです。今やあなたはキリストの奴隷、義の奴隷です。そして、それに伴い、神様からあなたに益が与えられています。

「それゆえ、死という自由(罪をおかす自由)と、いのちという鎖(キリストとの親密な絆)がある」とジョン・ストット師は書いています。

約束の地、パレスチナでヨシュアはイスラエルの救いの歴史を振り返りました。ヨシュアは、神様がいかにパレスチナの地をアブラハムの子孫(イスラエル)にお与えになったかを記しました。そして、エジプトで奴隷になっていたご自身の民を神様が救われたことを語りました。神様は彼らをパレスチナに連れ戻されました。ヨシュア記24：14-15でヨシュアは、イスラエルに対し、神様に仕えるか、異教徒の神に仕えるか選ぶように迫りました。24：15にある彼の最後の言葉は、彼の信仰の素晴らしい証です。「**ただし、私と私の家は主に仕える。**」ヨシュアは、奴隷制を用いて彼の考えを説明しました。イスラエルは、異国の神々に仕えるか、まことの神に仕えるかのどちらかです。パウロのように、ヨシュアも再び人々にまことの生ける神に仕えるように強く勧めました。私も皆さんに同じことを強く勧めます。

キリストを信じ、キリストに仕えることを人に強く勧めるのには、もっともな理由があります。それは6章の終わりに記されています。この節は、福音の要約です。また、罪と義の際立った違いを示しています。

そしてここでも悪い知らせと良い知らせがあります。6：23**罪の報酬は死です。しかし神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。**もう一度、アダムと主イエス様の違いを考えてみましょう。**アダムにある人は罪に仕え、キリストにある人は神様に仕えます。**彼らの行き着くところは全く違います。アダムある人々は死に至ります。キリストにある人々はいのちに至ります。さらにローマ6：23には新しい対比が加わっています。ジョン・ストット師はそれを「奉仕の条件」と呼んでいます。その条件に従って、二人の異なる奴隷の主人は行動します。罪は報酬を支払います。つまり、あなたが罪に仕えるなら、それに見合ったものを受けるということです。しかし、神様がくださるのは、無償の贈り物です。あなたは受けるに値しないけれども、それをくださいます。当時、罪の報酬とは、たいていの場合兵隊の報酬を意味していました。また、奴隷が受ける分という意味でした。しかし、神様からの賜物は、恵みによりあなたに与えられるのです。

自分の受ける分を手に入れようとする人は死にます。そのような人と神様の関係は死んでいて、その人の行き着くところは神様の王国ではなく、地獄です。しかし、神様の賜物、いのちの賜物は無償で、受けるに値しない人に与えられます。それは永遠のいのちです。主イエス・キリストの犠牲の死を信じる信仰により、私たちは神様の賜物を受け取ります。

ですから、この二つの奴隷制は全く異なるものです。一つは破滅に至り、もう一つはいのちに至ります。生まれによっては、私たちはアダムにあり、罪の奴隷です。しかし、恵みによっては、信仰ゆえに、私たちはキリストにあり、神様の奴隷なのです。

ある母親が息子の罪の赦しを請うて、ナポレオンのもとへ行きました。その息子はある犯罪を二度犯していました。法に則れば、その罰は死です。母親は言いました。「私は法の裁きを請うているのではなく、お情けをいただきたいのです。」ナポレオンは「しかし、あなたの息子は情けに値しない。」と答えました。母親は泣き叫び、「息子に受けるにふさわしいのなら、それは情けとは言いません。私がお願いしているのは、憐みなのです。」これに対して、皇帝ナポレオンは「よろしい、ではそれを与えよう。」と言って、その女性の息子の命を救ってやりました。

神様の裁きに従えば、あなた方も私も死刑にされて当然です。アダムが神様に反抗したように、私たちも罪を犯します。しかし、十字架で神様の裁きと憐みがあらわされました。主イエス・キリストは私たちの罪の代価を支払ってくださいました。私たちの身代わりとなってイエス様は死んでくださったのです。神様の裁きは、キリストにあって完結しました。そして今、神様はその憐みゆえに、私たちが自分で手に入れることのできない、受けるに値しないものを与えてくださいます。それは、私たちの罪の完全なる赦しと永遠のいのちです。これこそ恵み、神様の恵みです。

アーメン